

One step up!

加 藤 靖 正

学校教育法第109条の2により、文部科学大臣の認証を受けた評価機関（大学評価・学位授与機構、大学基準協会や日本高等教育評価機構など）による大学評価が義務化されて久しいが、その基礎資料となるのが大学のまとめる自己点検自己評価である。試行前にその概要についての説明がなされた際に、次のような質疑応答があったことを記憶している。「目標を下げておけば必ず達成できる。特に国立系の大学では優秀な人材が多いので、少しぐらい目標を下げておけば、目標を楽に達成できるのではないか」というのである。これに対して、「そのようなことをする大学は無いと考えている。故意に目標設定を低くすることは、第三者から見て直ぐにわかることである。それぞれに見合った目標を設定すべきである。」との返答であった。確かにその通りで、目標設定を故意に低くすれば、当然評価機関から指摘を受けることになる。

さて、皆さんは研究のあり方に、どのような思いをお持ちだろうか？学会で発表して、論文にまとめてどこかの科学雑誌に投稿する。全くその通りである。内容についてはどうだろうか？研究課題はどうやって見つけるのか？指導教官が選んだ課題であったなら、その研究の背景や問題点を的確に挙げることができるだろうか？問題点の解決法を的確に選べるだろうか？いろいろな疑問が沸いてくる。なんだろう？どうしてだろう？どうやればよいのだろうか？という素朴な疑問を持つことが、研究を遂行する上で最も重要なことなのである。研究者は、その疑問に対する答えをどのようにして求めるのか？どのように第三者に伝え理解してもらえるか？を吟味していく事になる。決して論文を書くための研究ではない。

さて、疑問に対する一通りの研究成果が得られた後、どのようにして公表するのか。学会発表でもよいのだが、最終的には論文として公表しなければならない。学会発表は、比較的多くの方に周知させる方法であり、会場での質疑応答は、仮説の立証をさらに一歩推し進めるアイデアを与えてもらえるよい機会とも言える。しかし、学会発表の演題採択時において、データが吟味されることはほとんど無い。従って結果の公表は、論文という形態をとらざるを得ない。通常、雑誌に掲載されるまでには、何人かの査読者による審査を受けなければならない。これが厳しければ厳しいほどデータの信頼性は高いと判断される。査読者は、投稿されたデータには偽りが無いという前提で審査をするので、本来査読者は示されているデータの真偽を判断するのではない。研究の動機・位置付け、主張する仮説を立証するに十分かどうかということを総合的に判断し、足りない場合は追加実験を要求したりする。違う実験により今までの主張が覆されてしまう可能性があるのなら、仮説の立証としては不十分ということになるからである。

論文発表は、より多くの人に注目されるためにも、地方言語である日本語よりも公共性の高い英語の方が適切であることは言うまでも無い。鈴木梅太郎が脚気を予防できる因子（チアミン）を生成して1911年1月、世界で始めて報告しながらも、公表誌が日本語の東京化学会誌であったため、世界的に認知されること無く、現在までチアミンの発見者は、1912年に報告した Casimir Funk ということになっている事例がある。このようなことを書いていくと、「研究の成果は絶対に英文雑誌に載せなければならない」というように強硬論を述べていると解釈される方もあるかもしれないが、私の主張はそうではない。もちろん、最も望ましい公表方法は世界的に認知されている雑誌に英文で公表することではあるが、物事には何事にも順序がある。

ここに、私は提案したい。皆が現況に甘んずることなく、各々のレベルに応じて常に一歩先へ進む努力をして、私達の研究レベルを向上させようではありませんか。指導を受けている初学者であれば、言われたままの受動的な行動から能動的な行動に変えてみる。いろいろな疑問を教官に投げかけ、常に問題意識を持つようになるだけでもよいだろう。また、実験が終了したら、学会で発表していろいろな人に意見を求めてみてほしい。学会発表は、研究の背景、問題点の提示、問題点を解決するための手法、実験結果の提示と得られた結果から言えることを第三者に伝えるトレーニングとしては最良の機会である。短時間に要点を相手に理解してもらうには、かなりのテクニックが要求されるのである。学会発表ができるようになったのであれば、論文投稿に挑戦してみよう。まずは日本語論文でも良い。次は英文に挑戦してみる。初めからすんなり書ける訳は無く、誰しも初めは苦戦するものである。Impact Factor 2点未満の雑誌に掲載できる実力があるのなら、2点以上の雑誌に挑戦してみる。論文投稿は、査読者の要求にどのようにこたえるかがポイントで、査読者の誤解に対しては査読者の心証を悪くしないよう丁寧に抗議しよう。査読者とのやり取りは、なかなかスリリングなものである。

最初から高望みをするのではなく、私達それぞれの能力に応じて、毎年 one step up するという意識を持ち続けることを、ぜひ実践してほしいと願ってやまない。

（奥羽大学歯学部口腔機能分子生物学講座）